

通信

～潟の歴史を未来につなぐ～

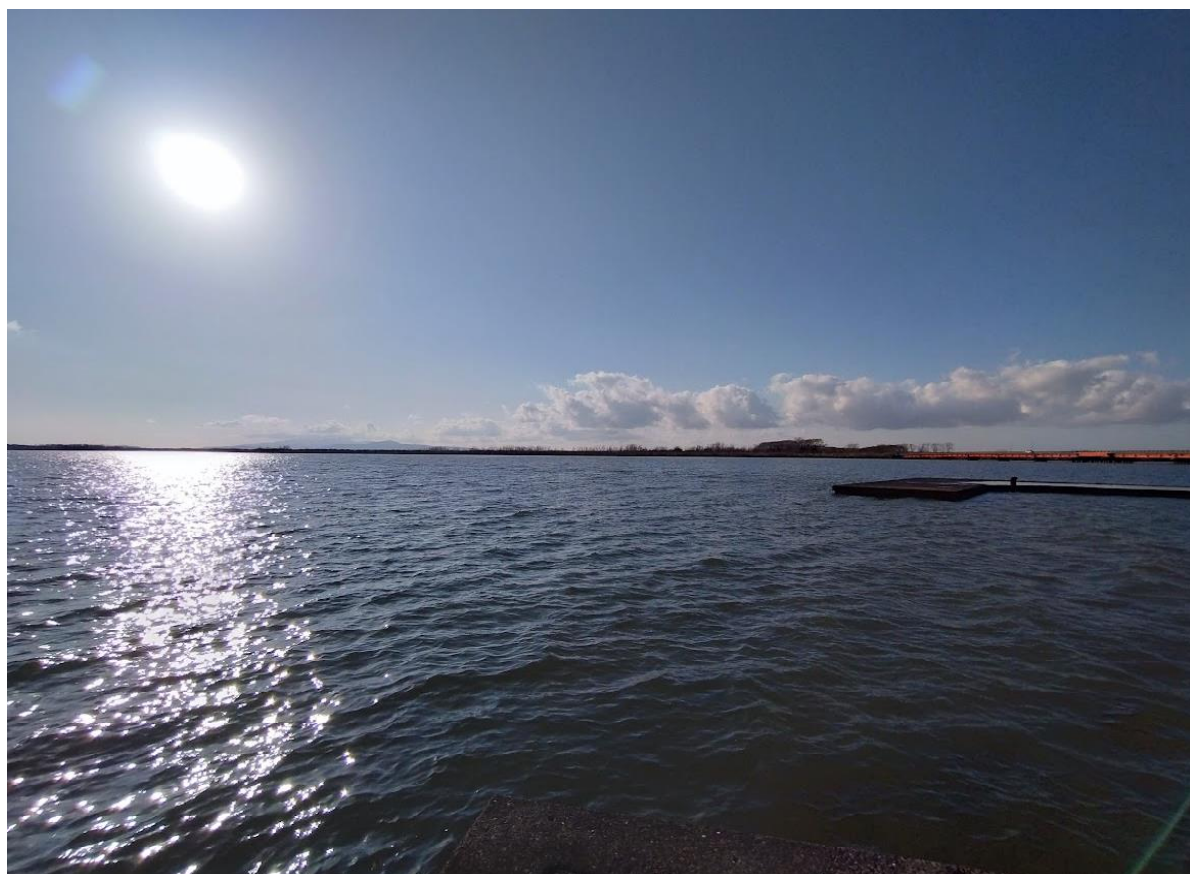


潟さべり

2023/03/21

第7号

八郎潟・八郎湖学研究会 発行



早春の八郎湖 (八郎潟町から大潟村を臨む 2023/03/20 撮影)

『八郎潟はなぜ干拓されたのか』をみんなで語る会」及び 令和5年度総会を開催します

令和4年度もコロナ禍等により目立った活動ができずに年度末を迎えようとしておりますが、会員の皆様にはお元気にてお過ごしのことと存じます。さて、昨春出版された谷口会長の著作「八郎潟はなぜ干拓されたのか」をみんなで語る会、並びに令和5年度の総会を次の通り開催いたします。感染予防に十分配慮して開催いたしますので、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

◇期 日 令和5年4月15日(土)

◇会 場 八郎潟町えきまえ交流館はちパル 交流ホール

◇日 程 受付 13:30～14:00

開 会 14:00～14:10 主催者あいさつ ほか

語る会 14:10～15:40 著者講演 及び 感想交流会

総 会 16:00～16:45

※詳細はチラシをご覧ください

「どじょう学習会」を開催しました

令和4年5月21日土曜日、本会の主催事業として「どじょう学習会」を開催しました。

当日は午前9時30分に八郎潟町えきまえ交流館はちパルに集合、15名の参加者を迎えて開会式と日程説明を行いました。

その後、杉山秀樹先生の案内で八郎潟駅からわずか数分の場所にある「安田勝次川魚問屋」へ伺いました。

年内に営業を終了する予定という安田勝次川魚問屋では、店主の安田勝次さん（昭和21年生まれ）より現在の業務の様子について詳しく説明をいただきました。

鮮度のいいどじょうを販売するための工夫として、水槽の水温管理（室内の温度管理を含む）が大切であることを教えてもらいました。その後、どじょうを大きさごとに選別する方法や出荷のやり方を実際に見せてもらいました。



また、かつて最盛期だったころのどじょう漁の様子や、むかし東京方面に列車で出荷したときの苦労話なども詳しくお話しいただきました。安田さんのお話は初めて知ることが多く、興味は尽きませんでした。

1時間ほどの見学の後、後半は会場を五城目町の大川公民館に移し、どじょう鍋の作り方を見学しました。調理担当は秋田市在住の猿田基さん（五城目町出身）で、しょうゆ味とみそ味の2種類のどじょう鍋のほか、どじょうの唐揚げ（素揚げ）も作ってもらいました。

その後、試食会を行いました。どじょうは

川魚特有の臭みが全くなく、骨もやわらかくて「おいしい、おいしい」と参加者に大好評でした。二種類のどじょう鍋とどっさりの唐揚げはあっという間に完食となりました。



試食後に参加者全員から感想や意見を述べてもらいました。新鮮などじょうのおいしさはもちろんのこと、遠く秋田県の八郎湖周辺から送られたどじょうが、東京などで高級食材として供されていたことに、改めて驚きの声が上がりました。

どじょう料理は現在、家庭ではほとんど食べることがなくなっていますが、このような食文化を守り伝えていくことが、やがては身近なこととして環境問題を考えるきっかけになるのではないかという感想も出されました。

◇安田さんにインタビューしました◇

○小さい頃の思い出

私の小さい頃の思い出は、家の近くに歓楽街があり、潟の若者達が橋の付近に船を留めて、夕方になるのを待ってくり出していく姿を見たことがあります。また夏になれば潟向いの五明光の方から、うり、スイカを満載した船が来て、何家族かが私の家の土間を借りて、売り終えるまで寝泊まりしたこともありました。

○曳網漁

曳網漁には、8月から行う船曳網漁、そして氷の上で行う氷下漁がありますが、漁師達は夏網、冬網と言っておりました。両方とも同じ網を使いますが、冬網の場合は網を曳いている時にうきが氷に食い込まないように、柳などの枝を付けてすべりをよくするなどの

工夫をします。夏網も冬網も十人くらいの人数が必要ですが、私が中学二、三年の時には人数が足りない時等にはよく、ひっぱり出されて手伝わされたものです。喉が渴けば水の上に小さな穴を開けて潟の水を飲みました。ほどよく塩味がして、甘く、うまかったと記憶しております。漁場は鯉川下でした。

○干 拓

三年生の時には少しずつ潟の岸の近くに大きな堤防が張りめぐらされており、氷の上から見ると何か巨大な壁ができたように感じられました。その時に使った漁具類は八郎潟町に寄贈して、現在はうたせ館に収納してあると思います。昭和39年の高校三年の夏に、橋は架かっていたがまだ渡れない時に、向こう岸まで歩いて行ったことがあります。そして堤防の上にあがり、潟底を見たときは一滴の水もありませんでした。

○家業の「どじょう」について

家業でどじょうを扱うようになったのは、たぶん昭和8年頃かと思います。当時はいくらでもどじょうが獲れたと思いますが、バイクも軽トラもない時代、遠方から活魚として大量に持ち込むのは大変だったと思います。

私が物心のついた頃、昭和30年頃には、自宅の裏には活魚小屋があり、どじょう生簀の他にも水を張った大きな木樽が十数個並べてありました。二階には曳網漁の漁具やうたせ漁の帆、さし網、うなぎザル、等々がびっしりと雑然と置かれてありました。

どじょうを獲る方法は、小学生の時に大人の人と一緒に竹ドを仕掛けたことがあります。当時は無尽蔵にいたタニシをつぶして、それをカラ鍋などでいためた米糖を混ぜて、竹ドの中に入れてから、竹ドを田圃の畦か堰にくっつけ朝まで置きます。夕方入れて早朝に揚げて獲っていました。竹ドで獲ったものは小さいのは竹のすき間から逃げて出ているので、比較的大きいものだけでした。

○どじょうの輸送

昭和30年代は、青森発上野行きの列車には特別にどじょう専用の特別車両がついていました。当時の駅名が一日市駅でした。一日市駅に着く頃には大半が青森県津軽地方のどじょうで埋まっていました。うちの場合はどじ

ょうに加え、うなぎも出荷しておりましたので、常時、大きなりやカーに山盛り3台ありました。どじょうは東京だけで、うなぎは北海道等にも出荷しておりました。

○環 境

今まで私の代でどじょうの取り扱いが一番多かった量は、買取量が40トンくらいで販売量は30～35トンだと思います。買取量と販売量の差は「目切れと死上り」です。

問屋に持ってくる人数はプロの人からじいさん・ばあさん合わせると60人ほどです。

一昨年(令和2年)のどじょう取り扱い量は2トン、昨年は夏場に雨が降らなかったということもあって1トンを切り800kgでした。一番のダメージは、今さかんに土手や畦に撒かれているラウンドアップという除草剤です。これがダブルパンチとなってどじょうが激減している現状です。

※安田さんへのインタビューは他にも行い、貴重な証言をたくさんいただきました。いずれ全てを公開できるよう努力して参ります。



書 評 紹 介

本会叢書第2弾として、昨春さきがけブックレットより刊行した、秋田県立大学教授の谷口吉光著「八郎潟はなぜ干拓されたのか」は、出版直後から大きな反響を呼び、たちまち重版となりました。これは「八郎潟・八郎湖」に関心を持つ人々がいかに多いかを如実に表すもので、本会としても新鮮な驚きを感じるとともに、今後の活動に大きな勇気をもらいました。

著者の谷口教授のもとには読後の感想がたくさんの方々から寄せられましたが、今回は昨年5月31日の秋田魁新報に掲載された、熊本大学大学院教授の牧野厚史氏(環境社会学)の書評を改めてご紹介いたします。

『「八郎潟はなぜ干拓されたのか」刊行よせて ～干拓後を考える道標に～』と題されたこの書評では、「本書は、干拓の歴史を、副産物ともいべき八郎湖の環境悪化からも振り返る」と、特に環境保全の観点からも大切な指摘

がなされています。

(前半部分 省略)

本書は、干拓の歴史を、副産物ともいべき八郎湖の環境悪化からも振り返る。湖の環境悪化は、干拓への補償がもたらした新規入植者と地元住民との人間関係のもつれも加わって、地元には暗い影を落としている。

干拓には漁民を含む地元住民の同意が必要であり、住民同意の背景には干拓で地域がよくなるという強力な説得があった。にもかかわらず、なぜ環境悪化や人間関係のもつれといった負の事態が生じたのか。

詳細は本書をぜひ読んでいただきたいが、その後の環境と関わる重要な分岐点を紹介しよう。八郎湖では、日本海から八郎潟を切り離して淡水の貯水池をつくる「ヤンセン案(複式干拓)」が選ばれた。複式干拓は、造成された干拓地の農業用水確保を可能にした反面、湖の漁業資源の多くが失われることにもつながった。八郎潟漁業の漁獲量の豊かさは、海とつながる汽水湖の魚類相にあったからである。漁民の同意は難しかったはずだが、本書は、県知事が臨席した漁民大会のエピソードを交えつつ、同意が実現したプロセスを興味深く描き出している。

本書のメッセージは3つあるように思う。第1に、干拓のような地域開発の環境評価では、変化の影響を受け続ける住民の評価を基本にすべきだという点である。第2に、住民による環境評価には、八郎潟の記憶、つまり八郎潟周辺で暮らしてきた人々の生活文化が関わるという点。そして第3に、八郎湖と関わるさまざまな立場の人々が、八郎潟以来の生活文化の継承と変容の中に自分たちの暮らしを位置づけることが、干拓によりもつれた地域の人間関係を組み直す出発点になるという視点である。

地元の講演会を基にした本書は、平易な言葉で読みやすく、複雑な歴史が、ブッ

クレットという手に取りやすい形にまとめられている。八郎潟地域の人々はもちろん、干拓の後遺症に悩む全国の人々が、次の一手を構想する際のよい道標(みちしるべ)になるだろう。



谷口吉光(秋田県立大学教授)著 880円

会員を募集しています

会員には通信を定期的にお届けするほか、各種イベントの案内、主催イベント参加費の軽減などの特典があります。

- 正会員……………3,000円
 - 団体会員………5,000円
 - 賛助会員 ……10,000円
- (会費はいずれも年会費です)

◎申込について

郵便局と秋田銀行に振込口座を用意しています。口座番号が印刷された郵便局の振込用紙もありますので、事務局までメール等でお問い合わせください。

～八郎潟・八郎湖に関心のある皆さん
ぜひ仲間に加わってください～

八郎潟・八郎湖学研究会

事務局：秋田県立大学 環境社会学研究室内
〒010-0195 秋田市下新城中野字街道端西241-438
TEL・FAX：018-874-8686(NPO法人はちろうプロジェクト内)
E-MAIL：88gaku@gmail.com
URL：<http://hachiro865.net/hachirores.html>